なるには BOOKS

作家になるには

野原一夫 編著

日文 701644901

193857

作家になるには

野原一夫 編著

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

大阪外国語学院図書館
藏书

ぺりかん社

著者紹介

野原一夫（のはらかずお） 1922年東京生まれ。東大独文科卒。新潮社，角川書店，月曜書房，筑摩書房で編集業務を担当。著書に「愛と苦悩の人生」（社会思想社），「回想太宰治」（新潮社）がある。

松田哲夫（まつだてつお） 1947年東京生まれ。東京都立大人文学部中退。筑摩書房編集部勤務。漫画，雑誌，文芸書などの編集を手がけている。編著に「戯歌番外地」（三一新書）がある。
〔第1部1執筆〕

祝部陸大（ほうりりくお） 1939年北京生まれ。筑摩書房編集部勤務。主として文芸単行本の編集に当たる。
〔第1部3執筆〕

玉井五一（たまいごいち） 1926年福井生まれ。東北大文学部卒。三一書房，新日本文学編集部，電通嘱託，フリー・ライター等をへて，現在創樹社代表。新日本文学会員。
〔第2部3執筆〕

作家になるには
（なるにはBOOKS 33）

昭和55年5月1日　初版第1刷発行
昭和56年4月20日　初版第2刷発行

© 1980

編著者　野原 一夫

発行者　救仁郷 建

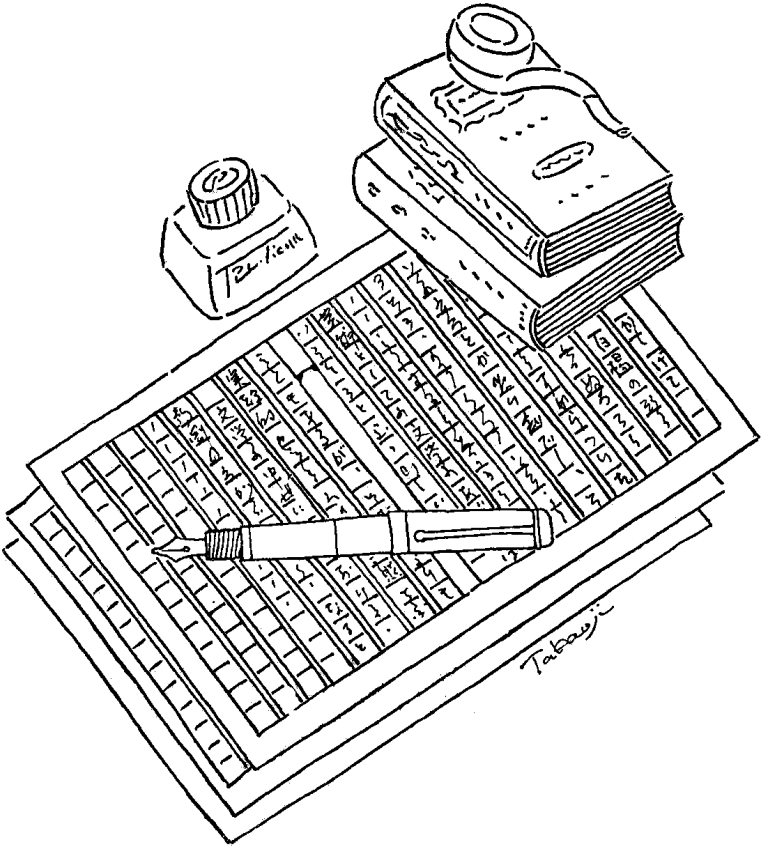
発行所　株式会社 ぺりかん社
〒113 東京都文京区本郷2-24-4
振替・東京0-48881 TEL 03(814)8515

定価850円
0090-807266-7612

制作 株式会社 凱風社
印刷・祥文堂印刷/製本・越後堂製本

作家になるには

野原一夫 編著



ぺりかん社

作家になるには　目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「作家」とは何か……7

Ⅰ 私の小説作法

1 いまだに焼け跡に立っている——野坂昭如インタビュー……14
2 記録小説から歴史小説へ——吉村昭インタビュー……31
3 文学伝習所にて——井上光晴 講義録……50

Ⅱ 作家の世界

1 小説とは何か……66
2 いろいろな形の小説……74
長篇・中篇・短篇／純文学と大衆小説・中間小説／私小説について／風俗小説について／歴史小説について／新しいジャンルの小説
3 詩・評論について……98
広い領域で活躍する作家／詩と小説と評論の間

4 どのようにして小説は作られるか——太宰治の実作に即して……112
私小説／日記をもとにした小説／他の文学作品をもとにした小説／歴史に題材を求めた小説／空想をもとにした小説／実話に取材した小説
5 発表の形……130
6 執筆のタイプ……136
7 作家の周辺……141
8 作家の収入……147
原稿料／印税／その他の収入／作家は恵まれているか

Ⅲ 作家になるには

1 なぜ作家になりたいのか……164
2 作家への道……167
投稿という方法／作家などに紹介してもらう方法／同人雑誌について／新人文学賞への応募／芥川賞と直木賞

3 あなたは作家になれるか……186
〈付録〉主要公募文学賞一覧……194
あとがき……204

写真提供■共同通信・筑摩書房・日本近代文学館
カバー・本とびらイラスト■高氏雅昭
本文イラスト■馬場富雄

3 あなたは作家になれるか……186
〈付録〉主要公募文学賞一覧……194
あとがき……204

写真提供■共同通信・筑摩書房・日本近代文学館
カバー・本とびらイラスト■高氏雅昭
本文イラスト■馬場富雄

「作家」とは何か

作家＝小説家

まずはじめに、どのような人を「作家」というのか、そのことから考えてみることにしましょう。私の手もとに『広辞苑』という辞書があります。昭和三〇年に発行された第一版なので、五一年一二月刊の第二版補訂版とは説明の文章がすこしちがうかもしれませんが、第一版のほうが、くわしくて丁寧のようです。その『広辞苑』をひいてみると、「作家」――「詩歌・小説・絵画その他すべて芸術品（多くは文芸作品）の製作者。特に小説家」――となっています。なるほど、とうなずけますね。

芸術品の製作者はすべて作家である、となっています。つまり、絵を描いたり、彫刻を作ったり、あるいは陶芸、漆芸、染織その他の工芸の分野でモノを作っている人たちも、また楽譜をにらみながら作曲をする人たちも、すべて「作家」であるというわけです。なるほど、そうにはちがいないのだが、普通一般には、絵を描く人は「絵描き」または「画家」と呼ばれていますし、彫刻を

作る人は「彫刻家」、作曲をする人は「作曲家」と呼ばれている。焼き物を作る人は、「陶芸作家」などと言われることもあるけれど、普通には「陶芸家」とされているようです。すべて芸術品の製作者は「作家」であると定義づけながらも、（多くは文芸作品）などとカッコつきの説明がわざわざしてあるのも、うなずかれるところです。

文芸の分野といってもなかなか範囲が広い。小説、戯曲、詩、和歌、俳句、随筆、ドキュメント、評論。これら文芸のいろいろの分野で仕事をしている人たちはすべて「作家」なわけですが、『広辞苑』の定義にあるように、そのなかで、特に小説家を「作家」と呼ぶのが社会通念になっているようです。なぜ小説家だけを特に「作家」と言うのか、それにはそれなりの歴史的なまた社会的な背景があるでしょうが、いまここでそれを究明することはやめにしておきましょう。あなたがお小遣いのなかから大枚八百五十円を割いてこの「作家になるには」という本を買ったとき、「作家」とはすなわち小説家のことだと、おそらく考えていたにちがいない。

小説しか書かない小説家はまずいない

しかし、小説だけしか書かない小説家というのは現代ではおそらく皆無なのです。ジャーナリズムからの注文による場合が多いのですが、新聞や雑誌などにいわゆるエッセイや雑文を書いている。なかには、本業の小説はあまり書かず、エッセイや雑文を専らの仕事としている小説家も少なくはない。また、文芸評論を本業としながら、そのかたわら小説を書いている、たとえば中村光夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

氏のような人もいるわけで、中村光夫氏は文芸評論家なのか小説家なのか、肩書をつけろと言われたら、中村氏御自身も困惑するでしょう。

小説家が同時に戯曲家である場合ももちろんあるわけです。安部公房氏などはそのいい例で、「壁」や「砂の女」や「箱男」などの作者であると同時に、「幽霊はここにいる」「巨人伝説」その他幾多の、日本演劇史上画期的な傑作を書いた戯曲家であり、同時に製作、演出の仕事にも精魂を打ち込んでいます。小説家が本業であるとは言えないのです。

だから、「作家」という職業人を、かりに「言語芸術」にたずさわっている人たちと限定するとしても、実際の仕事の内容は多方面にわたる場合が多いので、「特に小説家」を指すとしても、「小説家」とは何なのか、いささかあいまいになってくるのですが、まあ漠然と、主として小説を書くことを本業としている人、もしくは小説を書くことを生き方の中心においている人、くらいに考えておくことにしましょう。

職業としての作家

さてしかし、ここでまた困った問題が出てくるのです。「作家」という職業人、と私は書きましたが、職業人というからには、その職業で生活している人、生計を立てている人のことを言うわけです。たしかに、作家活動だけで生活している人も、いまの日本にはかなりの数います。もっとも、作家活動といっても、ものを書く仕事だけとは限らないので、たとえば講演、あるいは座談会

や対談の場に出席してものをしゃべる、しゃべることによる収入のほうが多い作家もいるのですが、それもまあ一種の作家活動ということにしておいて、それら一連の〝作家活動〟によって生計を立てている人はかなりの数いると言ってよい。しかし、そうでない〝作家〟もいるのです。ほかに職業を持っていて、収入のかなりの部分はそちらから得ている、そのかたわら創作活動を行っているという人も、その数は決して少なくない。医者、教師、編集者、銀行員、会社員、工員、その他、ほかにちゃんとした職業を持っていて、毎日その仕事に忙殺されていて、いわば余暇に小説を書いている人も少なくないのです。

たとえば、医者でいえば、これは医者というより軍人と言うべきでしょうが、鷗外森林太郎。森鷗外は二〇歳で東京大学医学部を卒業し、すぐに陸軍軍医副という仕事に就き、それからずっと陸軍軍医として働いていました。それも、並の軍医ではない。三二歳で軍医学校長、三四歳で陸軍軍医監。いかに時代が違うとはいえ、たいへんなスピード出世です。以後、陸軍軍医部の要職にあって、日清・日露の戦役にも従軍し、日夜の激務にたずさわっています。その間に、あれほどの大文業を成しとげたのですから、これはもう超人的と言ってよい。

たとえば、教師でいえば、漱石夏目金之助。夏目漱石は、二七歳で大学を卒業したあと、東京高等師範学校、松山中学（この時の経験が「坊ちゃん」のなかに生かされています）、第五高等学校、東京帝国大学で英語、英文学の先生として教壇に立ち、その間、「吾輩は猫である」「倫敦塔」

「坊ちゃん」「草枕」などの名作を書いています。

余暇に小説を書く人も作家

なにも鷗外、漱石ほどの大文豪を引き合いに出さずとも、ほかに職業を持って小説を書いている人は、いまの世にもたくさんいます。いわゆる主婦作家などもそのなかに数えてよいでしょう。家事をおよそしない主婦も現今ではいるようですが、料理、洗濯、掃除、育児、朝から晩まで家庭の仕事に追われながら、その合間に台所の片隅などで小説の筆を走らせ、それが立派な作品になっているという人もいるのです。

そのような、ほかに職業を持っていて（主婦業は収入こそ生まないが、それに専念しているならば職業と考えてよいのではなかろうか）、その余暇に小説を書いている人、たんに書いているだけでなく、その作品が世の中に認められ、商業ジャーナリズムの舞台に発表され、そこからの収入を得ている人、そういう人たちを「作家」と呼ぶのになんの躊躇も要らないように思われます。だって、鷗外、漱石を作家と呼ぶことにあなたはなんの躊躇も感じないでしょうから。

「作家」とは何かということが、すくなくともこの本で言う「作家」とは何かということが、かなりはっきりしたようです。それではいよいよ本題に入りましょう。

まずはじめに、現在文壇の第一線で旺盛な創作活動をしている三人の作家、野坂昭如、吉村昭、

井上光晴の三氏へのインタビューを読んでもらうことにします。もっとも、井上光晴氏の場合には、井上氏が主宰している文学伝習所において、どのようにして生徒たちを指導しているかの具体例が主な内容になっています。小説を書こうとする人たちにとって、たいへんにタメになる話だと思います。

I

私の小説作法

1 いまだに焼け跡に立っている

——野坂昭如インタビュー——

現代的なうさんくささ

野坂昭如さんは作家である。いわずもがなのことかも知れないが、ことさらそう言わなければならないほど、彼の行動や表現は多方面にわたっている。

ウイスキーやレインコートのコマーシャルタレントであり、歌手としては何枚ものLPやシングルを出していて、数多くのリサイタルも開いている。また、中年からキックボクシングやラグビーといった激しいスポーツに挑戦し、ベストドレッサーに選ばれたこともある。日本全国、特に大学を講演してまわり、対談をした相手は、のべ三〇〇人をこえている。その上、編集長をひきうけた雑誌『面白半分』に掲載した戯作「四畳半襖の下張」（永井荷風の作といわれている）が猥褻罪に問われて被告になり、昭和四九年には参議院議員選挙に立候補している。最近は、日本をとりまくエネルギー問題、食糧問題に深い関心を示し、専門家顔負けの予見や考察を発表している。

そうした多様な活動は、彼のトレードマークである黒眼鏡とテレビなどでの毒舌とあいまって、どこかうさんくさい存在として世間の一部ではとらえられているようだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com